

白菊しらぎくの花はなをよめる

凡河内躬恒おろこ
こ
うち
み
つね

心こゝろあてに— 折をらばや折をらむ』

初霜はつしもの— 置をきまどはせる』

白菊しらぎくの花はな

心こゝろあてに— 折をらばや折をらむ』

初霜はつしもの— 置をきまどはせる』

白菊しらぎくの花はな

【読み方】 ころあてに おらばやおらん はつしもの おきまどわせる しらぎくのはな

【語釈】 ○心あてに―当て推量に。なお、よく注意して、と解する説もある。○折らばや折ら

む―「ば」は未然形に接続して仮定条件を表す接続助詞。「や」は疑問の係助詞。「む」はこの場合、思い迷う意を込めた推量の助動詞。「や」の結びで連体形。可能と解する説もある。○置きまどはせる―置いて分からなくする。

【通釈】 あて推量にでも、折るとするなら折ってみようかしら。初霜が、霜か菊か見分けにくいようにして一面に置いてある中の白菊を。

【参考】 この歌の主眼は、第三句「初霜の」以下の句で、白菊の花が初霜の中で咲き匂っている様子を表現し、上二句に戻って「折らばや折らむ」と、やや誇張した表現で白一色の美しさを強める。これが近代人には思わせぶりに聞えるのである（正岡子規「五たび歌よみに与ふる書」明治三十一年）、当時としては新しい手法で、その底には美にあこがれる気持、耽美たんびの精神が息づいている。晩秋の景物の美しさが主題。百人一首の歌。

【作者】 生没年未詳。九世紀末から十世紀初頭にかけての歌人。甲斐少目しうまゐなど身分は低かったが歌人として著名で、古今集撰者の一人。

【出典】 古今集・卷五・秋下・二七七